

# 高校生における強迫現象の因子構造について

—特性不安、抑うつおよびストレス・コーピングとの関連—

Factor structure of obsessive-compulsive phenomenon in high school students:  
The relationship among trait anxiety, depression and stress-coping

関山 徹\*  
SEKIYAMA Toru

キーワード：強迫、Maudsley Obsessional-Compulsive Inventory (MOCI)、  
下位分類、高校生、健常者

## 1. 問題と目的

近年、強迫性障害（以下、OCDと略す）は、その「臨床的、生物学的、そして治療反応性などにおける多様性から、これが単一の疾患というより、いくつかの亜型に分類される可能性が指摘されている。そしてそれぞれに、もっとも有効な治療戦略を合理的に選択しようとする試みがなされている」（松永, 2002）。タイプわけにおいて最も主流なものは、cleaningやchecking、doubting、slownessなどの症状に注目する方法である。各症状はそれぞれに異なる発症のプロセスをもっていると考えられており（Rachman & Hadgson (1980) やde Silva(1986) など）、そのような見解に沿う研究としては、washerはcheckerよりも人格障害である可能性が高いという報告（Horeshら, 1997）などがある。また、症状とパーソナリティーの関連についての研究も行われており、たとえば、checkerはwasherよりも強迫性格の傾向が強いという報告（Gibbs et al., 1995）もある。しかしながら、Matsunaga et al.(2001) による日本人を対象にした調査では、checkerとwasherの間には、不安や抑うつ、完全主義などについて有意な差はみとめられていない。日本国内におけるさらなる調査が期待されよう。

強迫症状は強迫観念と強迫行為の2つに大別されるが、それらに類似した現象はOCD患者だけではなく健常者にもしばしばみとめられる（Muris et al., 1997; Salkovskis & Harrison, 1984 ;

Rachman & de Silva, 1978）。病者における強迫症状と健常者における強迫現象にはどのような異同があるのだろうか。Hadgson & Rachman(1977) は、患者の強迫症状の様子を把握するためにMaudsley Obsessional-Compulsive Inventory（以下、MOCIと略す）を作成した。そこでは、強迫症状をもつ100名の患者のデータを主成分分析した結果をもとにして、checking、cleaning、slownessおよびdoubtingの4つの成分が設定されている。このMOCIを、日本や香港、イタリアの大学生を対象にして実施したところ、どの調査においてもslownessに該当する因子は抽出されず、3因子構造を有していたという（Sanavio & Vidotto, 1985; Chan, 1990; 細羽ら, 1992）。しかしながら、健常者を対象にした調査の多くは大学生を対象にしており、他の年齢集団における因子構造はほとんど確認されていない。

そこで、本研究では、次のことを目的として調査をおこなうことにした。まず、大学生以外を対象とした場合に、強迫現象がどのようなタイプに分類できるか、因子分析を用いて確認することにした。高校生という時期は思春期（puberty）のただ中であって、従来からOCDが発症しやすい時期とされている（たとえば、平山（1990））。本研究では、そのような点も考慮して、調査対象として高校生を選択することにした。そして、上述の因子分析の結果を利用して、強迫現象のタイプが、不安や抑うつなどの精神的な不健康とどのような関連を有しているかを検討することにした。また、それだけではなく、心理的ストレスに対す

\* 鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター

る対処行動のパターンとの関連を併せてとりあげて、各タイプの発生の機序について考察を試みることにした。

## II. 方法

### 1. 対象

愛知県内の私立M高校1年生に在籍する男子生徒223名(普通科137名、商業科34名、工業科52名)を対象とした。平均年齢は、15.50歳(SD .50)であった。

### 2. 質問紙

#### 1) 強迫現象尺度

強迫現象を測定する尺度としてMOCIの邦訳版(吉田ら, 1995)を用いた。項目数は合計30である。しかしながら、このMOCIについては、杉浦・丹野(2000)によって「症状の有無しか測定できない」「因子構造が不安定である」「生育歴など強迫症状そのものでない項目が混在している」「逆転項目の意味がわかりにくい」という4つの欠点が指摘されている。そこで、本研究では、それらを可能な限り修正することにして、それをMaudsley Obsessional-Compulsive Inventory-Revised(以下、MOCI-Rと略す)と呼ぶことにした。1つめの批判に対しては、原版では「はい」か「いいえ」について回答する方式であったが、本研究では6段階に変更することで対応した。各段階の詳細は以下の通りである。「まったくあてはまらない: 1点」「あてはまらない: 2点」「どちらかというにあてはまる: 3点」「どちらかというにあてはまる: 4点」「あてはまる: 5点」「非常にあてはまる: 6点」。また、強迫傾向が強いほど高得点になる。2つめと3つめについては、結果と考察でとりあげることにした。なお、4つめについては、同等の刺激価を維持したまま表現を変更することは難しいため、あえてそのままとした。

#### 2) 特性不安尺度

不安の感じやすさを測定する尺度として、日本版STAI(水口ら, 1991)特性不安項目(以下、STAI-Tと略す)を使用した。項目数は、合計20

である。回答方法は、「まったくちがう: 1点」「いくらか: 2点」「まあそうだ: 3点」「そのとおりだ: 4点」の4段階であり、特性不安の度合いが高いほど高得点となる。

#### 3) 抑うつ尺度

抑うつ状態を測定する尺度として、Beck Depression Inventory-I(林, 1988; 以下、BDI-Iと略す)を用いた。BDI-IIは、原版のBeck Depression Inventory(Beck et al., 1979)を日本人用に改訂したもので、合計16問からなる。回答方法は、各問においてそれぞれ異なる4段階(1~4点)の短文を選択するようになっており、抑うつ度合いが高いほど高得点となる。

#### 4) コーピング尺度

ストレスを感じた時にどのような対処方略をとる傾向にあるか調べるために、Ways of Coping Check Lists-Revised(中野, 1991; 以下、WCCL-Rと略す)を用いた。このWCCL-Rは、Ways of Coping Check Lists(Folkman & Lazarus, 1980)を内容や項目数について改訂した尺度である。項目数は合計42であり、5つの下位尺度(問題焦点13項目、希望的観測12項目、社会的援助の探求6項目、肯定的認知7項目、自己非難4項目)から構成される。日常生活で困った場面に遭遇したときの対処について、「まったく使わない: 1点」「いくらか使う: 2点」「使う: 3点」「よく使う: 4点」の4段階で回答する方式である。したがって、あるコーピングを頻繁に使えば使うほど、該当する下位尺度が高得点となる。また、「いくらか使う: 2点」以上の段階を選択した項目の数を集計して、コーピング数とした。

### 3. 手続き

2000年7月に、上述の4つの質問紙を無記名式で同時に集団施行した。

## III. 結果と考察

### 1. 強迫現象尺度の整備と検討

まず、杉浦・丹野によって指摘されたMOCIの欠点を修正するために(特に3つめと4つめに関して)、以下のような処理と検討をおこなった。

MOCI-Rの各項目の平均値とSDを算出したところ、項目No. 1, 14, 19, 27で、「平均値±SD」の値が1以下あるいは6以上であった（Table 1参照）。そのため、これら4項目において天井効果ないしは床効果が生じていると判断して、削除することにした。また、強迫現象に直接関係がな

い生育歴についてとりあげているNo.11を削除した。次に、残りの25項目で因子分析（主因子法・バリマックス回転）を行った結果、解釈可能な3因子を得た（累積寄与率36.7%）。さらに、このうち因子負荷量が.35以上だった19項目を使って因子分析を行ったところ、3因子構造は保たれて

Table 1 MOCI各項目の平均値とSD

項目No.	項目内容	平均値	SD
1	不潔だと思うので、公衆電話は使わないようにしています。	1.69	1.04
2	いやな考えに取りつかれて、それからなかなか離れられません。	3.02	1.50
3	私は、人一倍正直であろうと心がけています。	3.21	1.24
4	何事も時間通りにできないためだと思いますがよく遅れてしまいます。	2.97	1.43
5	動物に触れるのがあまり汚いとは、思いません。(R)	4.55	1.32
6	ガスの元栓や、水道の蛇口、ドアの鍵などを閉めたかどうか何度も確認しないと気がすみません。	3.30	1.58
7	私は、非常に融通のきかない人です。	2.97	1.14
8	毎日のようにいやな考えが意志に反してわき上がってきて困っています。	2.74	1.28
9	偶然、誰かとぶつかるかどうかと過剰な心配をすることはありません。(R)	3.70	1.60
10	日常の何でもないことをしていても、これでいいのかとひどく疑問に思ってしまう。	3.16	1.49
11	私は子供の頃に、両親はどちらも特に厳しくはありませんでした。(R)	3.57	1.50
12	何度も繰り返してやり直さないと気がすまないので仕事が遅れることがあります。	2.84	1.24
13	石鹸は普通の量しか使いません。(R)	4.31	1.27
14	私には不吉な数字があります。	2.01	1.39
15	手紙を出す前に、何度も相手の住所や名前を確認することはありません。(R)	3.37	1.55
16	朝の身支度にそれほど時間はかかりません。(R)	4.31	1.47
17	私はそれほど潔癖性ではありません。(R)	4.38	1.28
18	細かいことまで、あれこれ考えすぎて困っています。	3.10	1.51
19	手入れのいきとどいたトイレなら何のためらいもなく使うことができます。(R)	4.80	1.25
20	いま困っていることは、何でも確かめないと気がすまないことです。	2.81	1.32
21	バイ菌や病気などのことは特に気になりません。(R)	3.44	1.52
22	私は何度も確かめる方ではありません。(R)	3.45	1.38
23	日常生活をどのように行うかを厳密には決めていません。(R)	4.61	1.22
24	お金に触れると手が汚くなるとは思いません。(R)	4.41	1.52
25	普通の時に、数を確認しながらすることはありません。(R)	3.84	1.38
26	朝の洗面に時間がかかります。	2.64	1.31
27	多量に消毒剤を使うことはありません。(R)	4.72	1.28
28	何度も確かめるので、毎日ひどく時間がかかってしまいます。	2.39	1.14
29	帰宅後、服をかたずけるのにあまり時間はかかりません。(R)	4.49	1.40
30	いくら慎重に行ったところで、うまくいかないと思うことがあります。	4.01	1.43

(R)：逆転項目

いた(累積寄与率45.5%)。しかし、No. 28の因子負荷量が、3つの因子間で似通った値(-.362, .374, .319)を示していたため、因子解釈のしやすさを優先させてこれを削除することにした。こうして最後に残った18項目について改めて因子分析をおこなったところ、予想通りの3因子を得て(累積寄与率46.0%)、第1因子をcleaning、第2因子をdoubting/ruminating、第3因子をcheckingと命名した。Cronbachの $\alpha$ 係数は、第1因子が.75、第2因子が.77、第3因子が.70であり、項目数の少なさを考慮すれば充分な値であった。また、因子分析結果の詳細と先行研究における因子の構成について、Table 2 にまとめた。

Table 2 を見て分かる通り、MOCI-Rの因子

Table 2 MOCI-Rの因子分析結果  
および先行研究との対照

項目 No.	因子分析結果 (註1)			先行研究 (註2)		
	F1 L	F2 DR	F3 H	Sanavio &Vidotto (1985)	Chan (1990)	細羽ら (1992)
17	.672			L	L	L
24	.594			L	L	L
21	.571			L	L	H
23	.555			H	L	H
16	.514			L		L
26	-.491			L		L
29	.355			L		
25	.348					
8		.732		DR	DR	DR
2		.704		DR		DR
18		.612	.332	H	H	DR
10		.597	.355	DR	DR	DR
4		.343				
6			.682	H	H	H
22			-.559	H		H
12		.335	.541		DR, H	DR, H
20		.330	.461	H	H	H
15			-.358			
1						L
3						
5					L	L
7						
9				L	L	L
11						
13						L
14						
19				L		
27				L		
28				H	H	H
30				DR, H	DR	DR, H

[註1] 因子負荷量は、絶対値 .300以上を掲載

[註2] L:cleaning, DR:doubting/ruminating, H:checking

構造はSanavio & Vidotto, Chanおよび細羽らの研究とほぼ一致しており、slowness因子は抽出されなかった。cleaning、doubting/ruminatingおよびcheckingは、大学生だけではなく高校生にも共通してみとめられる因子であり、slownessはOCD患者に特有な因子である可能性が高いと考えられる。また、天井効果や床効果が生じていた弁別力のない項目を削除したことにより、安定した因子構造が得られたと考えられる。したがって、MOCI-Rは一応の信頼性と妥当性を備えており、そこで得られた因子を健常者における強迫現象のタイプとみなしても問題はないと判断した。

## 2. 強迫傾向のタイプと特性不安、抑うつおよびストレス・コーピングとの関係

### 1) 相関

MOCI-Rの各因子とSTAI-T、BDI-Iおよびコーピングとの相関係数を算出した (Table 3を参照)。まず、精神的な不健康に関する側面との関連を見ていくと、cleaningはSTAI-TおよびBDI-Iと弱い正の相関を示していた。doubting/ruminatingは、STAI-Tとは高い正の相関を、BDI-Iとは中程度の正の相関を示していた。checkingは、STAI-Tとは中程度の相関を、BDI-Iとは弱い正の相関を示していた。次に、心理的ストレスを感じた際のコーピングとの関連を見ていくと、doubting/ruminatingは自己非難とは中程度の正の相関を、希望的観測とは弱い正の相関を示していた。checkingは、希望的観測、社会的援助の探求および自己非難で弱い正の相関を示していた。また、cleaningでは有意な相関はみとめられなかった。以上からは、精神的な不健康状態と強迫現象との関係は、doubting/ruminatingが最も結びつきが強く、2番目にchecking、最後にcleaningの順となっていると推察される。

### 2) 重回帰分析

特性不安、抑うつおよびコーピングが、強迫現象の各タイプにどのような影響を及ぼしているかを検討するために重回帰分析をおこなった。その際、STAI-T、BDI-Iおよびコーピングの得点を独立変数、MOCI-Rの各因子を従属変数として投入した。詳細な結果は、Table 4に示した。

(A) cleaning

cleaningを従属変数として重回帰分析をおこなった。分散分析により重回帰式の有意性を検討したところ、有意な結果がみとめられた ( $F(8, 214)=2.83, p<.01$ )。さらに、標準偏回帰係数を検定した結果、BDI-Iと問題焦点コーピングとの間に有意な正の相関がみとめられた。すなわち、cleaningには、抑うつの高さと問題焦点コーピングの多さの影響が大きいことが示された。

問題焦点コーピングは、問題を直視して積極的に問題に立ち向かっていく対処方略である。しか

しながら、問題焦点コーピングの多用が抑うつの高さ結びついてcleaning現象に影響しているとなると、その積極性の意味について改めて考え直す必要があるだろう。この場合には、対処の積極性がむしろ裏目に出てしまって、抑うつ状態のきっかけになった出来事に対して、意識が過剰に焦点づけられてしまっているように推察される。

(B) doubting/ruminating

doubting/ruminatingを従属変数として重回帰分析をおこなった。分散分析により重回帰式の有意性を検討したところ、有意な結果がみとめられた

Table 3 特性不安、抑うつおよびコーピングについての平均値、SDおよび相関係数

	平均値	SD	強迫傾向尺度との相関係数 ( $n=223$ )		
			cleaning	doubting/ruminating	checking
STAI-T	48.81	9.87	.20 ***	.62 ***	.43 ***
BDI-I	24.22	6.63	.22 ***	.44 ***	.20 ***
WCCL-R					
問題焦点	29.79	6.25	.12	.04	.10
希望的観測	26.71	5.44	.09	.26 ***	.22 ***
社会的援助の探求	14.44	4.20	.10	.11	.22 ***
肯定的認知	16.51	3.73	-.01	-.09	.06
自己非難	9.06	2.77	.11	.40 ***	.34 ***
コーピング数	33.06	7.05	-.04	-.08	-.09

(\*\*\*:  $p<.005$ )

Table 4 強迫現象の各タイプと不安、抑うつおよびコーピングとの関連についての重回帰分析

	標準偏回帰係数 ( $\beta$ )		
	cleaning	doubting/ruminating	checking
STAI-T	.14	.54 ****	.46 ****
BDI-I	.17 *	.10	-.08
WCCL-R			
問題焦点	.24 **	.15 †	.04
希望的観測	-.01	-.08	-.12
社会的援助の探求	.06	.05	.17 *
肯定的認知	-.14	-.12	.00
自己非難	-.07	.10	.12
コーピング数	-.06	-.09 †	-.12 †
重相関係数 ( $R$ )	.31	.65	.50

(†:  $p<.10$ , \*:  $p<.05$ , \*\*:  $p<.01$ , \*\*\*\*:  $p<.001$ )

( $F(8, 214)=19.59, p<.001$ )。標準偏回帰係数の検定の結果、STAI-Tとの間に有意な正の相関がみとめられた。また、問題焦点コーピングとは有意傾向のある正の相関が、コーピング数とは有意傾向のある負の相関がみとめられた。すなわち、*doubting/ruminating*現象は、特性不安の高さ、問題焦点コーピングの多さおよびコーピング数の少なさの影響が大きいことが示された。

先述したように、問題焦点コーピングは、本来は積極的な対処行動のひとつである。しかしながら、高い特性不安を伴って問題焦点コーピングを多用している場合には、懸念している問題の内容に意識が集中してしまい、むしろそこから抜け出しにくい状態に陥っているように考えられる。さらに、ここにコーピング数の少なさが随伴していたことは注目すべき点である。コーピング数の多さは、状況に応じて対処行動を柔軟に変化させることのできる能力の高さである。なぜなら、物事の解決は、正面突破だけが唯一の方法ではなく、さまざまな方法を組み合わせて対応するほうがうまくいく場合が多いからである。したがって、*doubting/ruminating*現象が生じる際は、不安の内容を過剰に意識してしまうことによりかえって柔軟性を欠いてしまい、他の対処方略をとることができにくい状態にあると推察される。

### (C) checking

checkingを従属変数として重回帰分析をおこなった。分散分析により重回帰式の有意性を検討したところ、有意な結果がみとめられた ( $F(8, 214)=8.79, p<.001$ )。標準偏回帰係数の検定の結果、STAI-Tと社会的援助の探求コーピングとの間に正の相関があった。また、コーピング数とは、有意傾向のある負の相関がみとめられた。すなわち、checkingには、特性不安の高さと社会的援助の探求コーピングの多さおよびコーピング数の少なさの影響が大きいことが示された。

社会的援助の探求コーピングは、一人で問題を抱え込まずに社会的資源を活用できる反面、他者に対して依存的になりやすい面がある。すなわち、checking現象は、不安を社会的援助によって解消しようとする傾向が高いと考えられる。また、コーピング数の少なさは、この傾向がより強

いことを示しているだろう。確認強迫の患者が、家族などの身近な親しい人々を巻き込んで確認行動をおこなうことが多いのは周知の事実であり、健常者においても程度の差こそあれ同じ傾向が認められたことは興味深い。また、成田を中心とする研究者たちは(成田ら, 1974; 成田, 2002)、OCDを「不安解消に他者を動員し他者をして強迫行為の一部あるいはかなりの部分を代行させる」巻き込み型と「症状のためにさらに他者から孤立していく傾向」をもつ自己完結型に分類しており、前者には境界例水準の人格構造を想定している。人格の統合水準と強迫のタイプの関連については、Horesh et al.の報告なども考慮しながら、さらに検討していく必要があるだろう。

### 3. 総合的考察

以下では、これまでの内容を振り返りながら総合的に考察していく。

Steketee et al. (1985) は、*washer* (cleaningに相当)のほうがcheckingより不安と関連が高いと考えているが、本研究ではこれとは反対の結果がみとめられた。すなわち、*doubting/ruminating*現象とchecking現象では特性不安の影響をより強く受けていたが、*cleaning*現象ではむしろ逆で、抑うつ状態の影響のほうが大きかったのである。しかしながら、Rachman & Hadgsonによればcheckingは危険を未然に防ごうとする予防的な(preventive)対処行動であり、*cleaning*は危険を最小限に抑えるための修復的な(restorative)対処行動として説明している。そのように考えるのならば、本研究におけるchecking現象と特性不安との関連と、*cleaning*現象と抑うつ状態との関連は理解しやすい。なぜなら、大抵の場合、不安とはこれから起こるかもしれない事柄をめぐって気分が落ち着かなくなることであり、抑うつとは既に生じた出来事をめぐって気分がふさぐことであるからである。さらに、コーピングとの関連から検討すると、*cleaning*現象と*doubting/ruminating*現象では、問題焦点コーピングがかえって精神的不健康を助長していることが推測された。そのため、これらの現象に相当する症状をもつ患者の治療においては、正面から問題に取り組むことだけが解決

法ではないことを示していくことが有効であろう。一方、checking現象では、社会的援助の探求コーピングの多用と関連があり、周囲の人々を巻き込んで依存的になりやすい傾向が推測された。そのため、この種の症状をもつ患者の治療においては、他者依存のメカニズムを維持・拡大してしまう近親者の対応のあり方を変化させることや対処方法を多面的なものに変化させることが有効であると考えられる（しかしながら、当然、これらのことを直接に患者に指摘しても、治療的効果はほとんど見込めないだろう。あくまでも、それぞれの治療者が依拠する理論や技法と統合された形で実践した場合においてである）。また、doubting/ruminating現象は、項目内容を見ればわかるように強迫観念に相当するものである。checking現象やcleaning現象では不安や抑うつを減らすためにそれなりの対処行動がおこなわれるが、doubting/ruminating現象では問題を過剰に意識するばかりでその対処パターンは柔軟性を欠いて実際的でない状態にあり、他の2つの強迫現象よりも精神的な不健康と関連が強いことが示唆されたといえよう。

本研究では、男子高校生の強迫現象は、MOCI-Rを用いると各国の大学生と同様に3つのタイプに分類することが可能であり、それぞれのタイプは特性不安、抑うつおよびコーピングと異なる関連のパターンを有することが明らかになった。しかしながら、強迫現象は、各個人に1つのタイプのみが生じているとは考えにくく、実際にはそれぞれのタイプが混合した状態にあるはずである。本研究では、そのような点については扱うことが出来なかった。また、MOCI-Rは項目数が少ないために強迫の諸現象を包括的にとらえきれなかった可能性も残している。今後は、項目数の多いPadua Inventory (Sanavio, 1988) などの使用も考えていきたい。

#### 【引用文献】

- Beck, A.T., Rush, A.J., Shaw, B.F. & Emery, G. (1979) *Cognitive Therapy of Depression*. New York: The Guilford Press.
- Chan, D. W. (1990) The Maudsley obsessional-compulsive inventory: A psychometric investigation on Chinese normal subjects. *Behaviour Research and Therapy*, **28**, 413-420.
- de Silva, P. (1986) Obsessional-compulsive imagery. *Behaviour Research and Therapy*, **24**, 333-350.
- Folkman, S. & Lazarus, R. S. (1980) An analysis of coping in a middle-aged community sample. *Journal of Health and Social Behavior*, **21**, 219-239.
- Gibbs, N. A. & Oltmanns, T. F. (1995) The relation between obsessive-compulsive personality traits and subtypes of compulsive behavior. *Journal of Anxiety Disorders*, **9**, 397-410.
- Hadgson, R. J. & Rachman, S. (1977) Obsessional-compulsive complaints. *Behaviour Research and Therapy*, **15**, 389-395.
- 林 潔 (1988) 学生の抑うつ傾向の検討. カウンセリング研究, **20**, 162-169.
- 平山正実 (1990) 青年期における神経症的病態の特徴：強迫神経症. 臨床精神医学, **19**, 773-779.
- Horesh, N., Dolberg, O. T., Kirschenbaum-Aviner, N. & Kotler, M. (1997) Personality differences between obsessive-compulsive disorder subtypes: Washer versus checkers. *Psychiatry Research*, **71**, 197-200.
- 細羽竜也・内田信行・生和秀敏 (1992) 日本語版モーズレイ強迫神経症質問紙 (MOCI) の因子論的検討. 広島大学総合科学部紀要IV理系編, **18**, 53-61.
- 松永寿人 (2002) 強迫神経症から強迫性障害へ. 心の科学, **104**, 10-14.
- Matsunaga, H., Kirii, N., Matsui, T., Iwasaki, Y., Koshimune, K., Ohya, K. & Stein, D. J. (2001) A comparative study of clinical features between pure checkers and pure washers categorized using a lifetime symptom rating method. *Psychiatry Research*, **105**, 221-229.
- 水口公信・下仲順子・中里克治 (1991) 日本版 S T A I. 三京房.
- Muris, P., Merckelbach, H. & Clavan, M. (1997)

- Abnormal and normal compulsions. *Behaviour Research and Therapy*, **35**, 249-252.
- 中野敬子 (1991) 対処行動と精神身体症状における因果関係について. *心理学研究*, **61**, 404-408.
- 成田善弘 (2002) 強迫性障害と強迫性格. *こころの科学*, **104**, 88-89.
- 成田善弘・中村勇二郎・水野信義・石川昭雄・河田晃・河田美智子 (1974) 強迫神経症についての一考察: 「自己完結型」と「巻き込み型」について. *精神医学*, **16**, 957-964.
- Rachman, S. & de Silva, P. (1978) Abnormal and normal obsessions. *Behaviour Research and Therapy*, **16**, 233-248.
- Rachman, S. & Hodgson, R.J. (1980) *Obsessions and compulsions*. Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice Hall.
- Salkovskis, P. M. & Harrison, J. (1984) Abnormal and normal obsessions: A replication. *Behaviour Research and Therapy*, **22**, 549-552.
- Sanavio, E. & Vidotto, G. (1985) The components of the Maudsley obsessional-compulsive questionnaire. *Behaviour Research and Therapy*, **23**, 659-662.
- Sanavio, E. (1988) Obsessions and compulsions: The Padua inventory. *Behaviour Research and Therapy*, **26**, 169-177.
- Steketee, G. S., Grayson, J. B. & Foa, E. B. (1985) Obsessive-compulsive disorder: Differences between washers and checkers. *Behaviour Research and Therapy*, **23**, 197-201.
- 杉浦義典・丹野義彦 (2000) 強迫症状の自己記入式質問票: 日本語版Padua Inventoryの信頼性と妥当性の検討. *季刊精神科診断学*, **11**, 175-189.
- 吉田充孝・切池信夫・永田利彦・松永寿人・山上榮 (1995) 強迫性障害に対するMaudsley Obsessional Compulsive Inventory (MOCI) 邦訳版の有用性について. *精神医学*, **37**, 291-296.